

光と影を見た1年

会員 菅原 草子

1 はじめに

LIBRA1・2月号が発行される頃、私は弁護士になってちょうど1年を迎えている。そして、72期の後輩が入所しているだろう。大活躍だった「新人」という盾は、もう私を守ってはくれない。あっという間だなあ。良きタイミングでいただいたこの機会に、1年を振り返ってみたいと思う。

2 光と白と表の面

実は私は、大学院まで農学部にも所属し、白衣を着て食品化学の研究をしていた。かくかくしかじかで、本当に突然、未知の法律の世界に飛び込んでみた結構無謀な人間である。理由の一つは、「〇〇社の誰か」になるのではなく、「自分」としてたくさんの人にとってみたかったからだ。

幸いそれはまさに叶い始めている。毎日何人もの依頼者に会って話ができる。さらに、テレビ局や新聞社の方をはじめ、芸能人や作家など、異業種の方にも会う機会が多い。弁護士バッジを付けた瞬間、ついこの間まですれ違うこともできなかった人との、予想もしなかった出会いがあるのだ。なんて夢のある仕事だろうか。

そして、東京弁護士会には何千人もの大先輩たちがいる。委員会活動でも会派活動でも多種多様な先輩に会うことができ、一般企業内であつたら挨拶することも憚れる上司のような重鎮弁護士にも、直接お話を伺える。1年間で何百名の名刺をいただいただろうか。これまでの学生生活とは異なり、無数の人間が行き交う場所に所属しなくなってしまった今、人間好きな私としては、委員会も会派もありがたく楽しい場所である。一個人として、たくさんの人と接することができるのは、社名を背負っていない「弁護士」だからだ。新たな出会いで世界が広がるときは、俗世と離れ僧侶のごとく勉強した受験生活を乗り越えて良かったと、心から思える瞬間である。

3 影と黒と裏の方

こちらの世界に飛び込んだ理由のまた一つは、輝く金色のバッジを付けて高収入の高層ビルでキラキラした生活をしている人になりたい、という小学生みたいな単純なものだ。

さて、今の私。確かにバッジは光っている。新人だから。しかし毎日キラキラだなんて夢見すぎな話で、実際はどんな仕事よりも身も心もボロボロになる職業なのではないかと気付きつつある（気付きすぎたことはない）。弁護士はやはり戦わないといけない。法廷で、交渉ではもちろん、敵対関係とは限らない誰かとの会話も、自分の発言がいつどう影響するかわからないと思うと、もう息を抜ける時間などない。なんなら所内での先輩弁護士との会話だって緊張している。そして、そんな日々をどこまで耐えられるか、もはや365日が自分との戦いである。

その結果、私は強くなった。体力（というか気合）に磨きがかかり、睡眠時間が少ない日が続いても、栄養が偏った食事をしていても、倒れることなく皆勤賞である。そして、人間いい人ばかりじゃないと知った。東北でのんびり生きてきた競争嫌い警戒心ゼロの私には、東京の風は冷たく厳しいことが多く、めちゃくちゃに傷ついた結果、仕事とプライベートを切り分けて身も心も守る術を覚えた（細かく言えば覚えている最中である）。

4 おわりに

というように、光も影もある1年だった。正直、光なんてたまに訪れればラッキーで、前が見えない日の方が多かったかもしれない。それでも「弁護士」を捨てられず、なおも辛く苦しい道を選びがちな私はドMだろうか。今日もボロボロになりながら、いつかキラキラな高層ビル弁護士になる日を夢見ているのである。